

グリフィンの日常

けんろん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはとあるグリフィン基地の日常、そのほんの一部を描いたものである。

目

次

バニーガール先輩

手のひらの上で

夜這い前線

7 3 1

バニーガール先輩

「ほら、ぴょんつて言つてみ？ぴょんつて」

「くつ…！」

本部から送られてきた支給品。その中になぜかうさ耳のカチューシャが混ざっていた。

いつぞやに行つた『ウサギ狩り作戦』に何か関連があるのかと問い合わせてみたものの、本部からの回答は「嗜好品」。意味はわからないうが、嗜好品と言うのであれば楽しむべきなのだろう、と思案しているところにタイミングよく現れたのが。

「わーちゃんならぬ、うーちゃんだな」

「何よそれ！うう…なんで私がこんな…」

戦術人形WA2000。

作戦結果の報告に”たまたま”やつてきた彼女に、うさ耳を装備するよう指示した。

断つておくが、これを提案したのは副官のスプリングフィールドであつて、私ではない。だから露骨に嫌がるWAに命令権を使ってまで付けさせたのは、本来ならば職権濫用も甚だしく決してやつてはいけないことなのだが、まあ仕方のないことなのだ。

だつてかわいいもの。

「うふふつ、やつぱり。とても似合っていますよ？わーちゃん」

「スプリングフィールド…アンタね？このバカをそそのかしたのは！」

外したくても外せないそのうさ耳を揺らしながら、副官殿を睨むWA。

A。その顔は赤く染まつており、わなわなと肩を揺らしている。

「まあまあ、いいじゃないですかたまには。指揮官もそう思うでしょう？」

「うんうん、かわいいぞうーちゃん」

「か、かわ…っ！てつ適當なコト言つて誤魔化そうつたつてそうはい

かないわよ！」

「語尾はぴょんだぞ。ほら、言つてみ？かわいいから言つてみ？一回でいいから」

「言うわけないでしょ！もう知らない！アンタなんかさつさと○ねばいいのよ！」

ふんっ！という具合に捨て台詞を吐きながら司令室を出て行くW Aの背中を見送ったあと、彼女に忠告しそびれたことを代わりに隣のスプリングファイールドに向けて呟いた。

「……あいつ、命令で外せないってことわかつた上で見せびらかしに行つたのか？」

「……かわいいからいいんじやないでしようか」

「それもそうか」

機嫌取りに後でチヨコアイスでも用意しておくか、と考えながら目の前の書類に視線を戻す。すると何を思ったのか、亜麻色の髪の淑女から耳を疑う言葉が飛び出した。

「んつんん……それで、午後からの模擬演習の内容はいかがいたしましたぴよん？」

衝撃が脳天を貫いた。

撃たれたときというのはこんな感じなのだろうか。あろうことかスプリングファイールドは先ほどのウサギに触発されたのか、普段は絶対に言わないであろうことを、普段は絶対に見せないような羞恥ほんのり染まつた顔で言い放つた。

「…………あ、あの、すみません。忘れてください」

「録音するからもう一回言つてくれるか」

「えつ」

手元のメモに『ウサ耳 追加発注 他の種類も』と即座に書き込んだ。

おのれ本部め、たまにはいい仕事をするものだ。

手のひらの上で

「ふふつ♪今動きましたよ」

「…」

「あつ、力強く蹴つてますね…どつちに似たのかな?」

「…あのさ」

服の上からでもわかるほど、大きく膨らんだUMP45のお腹。それを愛おしそうに撫でる彼女の様子は、まさしく我が子の誕生を今か今かと待ちわびる母親そのものだった。

戦術人形は妊娠なんてしない。

そんな暗黙の常識を疑いたくなるほど、彼女の瞳は慈愛に満ちていた。

その存在の秘匿性から、彼女に接触できる者はごく限られている。少なくとも現在は当基地に滞在しており、一般的な生命の誕生にかかると思われる期間以上は、ここに居たはずだ。

そしてこのグリフィン内で彼女に、その、綿密な接触をした人間の男性は、ここに1人のみ。

そこから導き出される答えは、つまりそういうことになるのだろう。

ただ一点、

「…………そろそろ解放してやれ、2号が可哀想だろう」

「なんだ、もうちょっとノッてくれてもいいんじゃない?」

45が本当に妊娠していれば、の話だが。

彼女は心底つまらないと言わんばかりにため息を吐くと、服をそつと捲り上げ包み込んでいたものを離した。

服の中から出てきたのは、子犬。

『2号』と呼ばれる彼、もしくは彼女は当基地で飼っているペットだ。

なぜ『2号』なのかは……まあ置いといて。

「まつたく、どうしたんだ突然。ドッキリならもう少し笑えるやつを頼む」

「あら、笑ってくれてもよかつたのよ?『人形が人間の真似事か』って代わりにクスクスと笑う彼女の目は、笑っていなかつた。そんな彼女の自虐に、心中穏やかでなかつた私はつい、睨みつけるような視線を送つてしまふ。

「…45」

「冗談よ。そんなに怖い顔しないでよ、ただの遊びなんだから」「はあ」

45が言うと洒落にならない。

本気で心配するとスルリと抜けてしまうくせに、放つておくどんどん自分を追い込むのが彼女の悪いところだ。

解放された2号は元気そうに司令室の床をくんくんと嗅ぎ回つている。

「とにかく反応に困る冗談はやめてくれ、心臓に悪い。一瞬本当に焦つたぞ…」

「…ふうん?」

それを聞いた45は何を思つたか、書類を広げ仕事をする私の指揮官机の前まで近付いてきた。

先ほどまでの憂いを帶びた表情はどこへやら、お気に入りのおもちゃを見つけたように口角を上げている。

「焦つた、か。ねえ? 指揮官。何をそんなに焦つたのかな?」「そりやあ…」

言いかけて、しまつたと思つた時にはもう遅かつた。

ここから先は、すでに彼女の手中だ。

「私がもししどこの馬の骨ともわからない男に懷妊させられたとして、心優しい指揮官なら怒るか心配するはずでしょ? それが、なんで、焦るのかなー?」

「…だからその、アレだよ」

『まさか人形が妊娠するなんて。もしそうならきっとその子供は…』なんて、考えちゃつた?」

「…しらん」

「ふふつ、かわいい」

机の前で跪く45にずい、と下から覗き込まれる

彼女の瞳が悪戯っぽく妖艶に煌めいているのが視界に入った。

「でも、そう考えてくれないと困るなあ。だつて、可能性があるのは指揮官しかいないんだから」

「どうだか」

「…もしかして拗ねちゃった？これは本當だよ。なんなら…確かめてみる？指揮官専用かどうか」

さらにじわりと近寄る45。

あちらからは決して触れない。

けれども、触ってくれと言わんばかりに無防備な顔を晒す。

だがここで勘違いすれば思うツボだ。

からかわれるのは慣れている。

「…こちとら仕事中なんだ、報告が終わつたらさつさと宿舎へ戻れ」

「ちえ、つれないなー」

45はそう言いながら立ち上がり、特に埃も付いていない膝をぱんぱんと数回叩いた。

そして数拍後、華麗にくるりと出口の方へ振り向き、灰色と言うには煌めいて見える髪をなびかせた。

「おいでー、2号」

「わんっ」

側にあつた来客用ソファの周りを這うように駆け回っていた子犬は、素直に呼びかけに応え彼女の元へ駆け寄った。

45はそれを慣れた手つきで抱えると、再び服の中にしまい込み始めた。

「おい、なんでまた服の中に入れてるんだ」

「そろそろかなーと思つて」

「そろそろ？ いつたい——」

なにが、と聞く前に勢いよくドアを開ける音がこだました。

「たつだいまー！ 指揮官、作戦完りよ：45姉？ わわつ、どうしたのそ

のお腹！」

「おかえり♀。どうしよう？指揮官に妊娠させられたのに認知してくれないのよー♪」

「違つ！」

えええー！と大きさに驚いてみせる♀に詰め寄られながら、遠巻きにこちらを見ている45と目が合つた。

あるいは少女のようなあどけなさを。

あるいは女性のような妖艶さを。

複雑な色を重ね合わせながら、舌をちろりと出してみせる彼女を見て、つくづくため息が出る。

ああ、今日も私は、彼女の手のひらの上で。

夜這い前線

消灯時間も近い深夜。

厳密に言えば消灯時間など規定にはない。秩序立った生活の為に、と當基地の指揮官が適当に言つてゐるものだ。

それでも、バーと出撃部隊以外は静まり返るような時間帯。

そんな時に廊下を早足で駆ける足音がひとつ。HK416は、その透き通る空のような銀髪を揺らしながら、とある場所へ向かつていた。

コツコツという心地良い音が、逸^{はや}る気持ちを表すかのように速いりズムを刻んでいる。

改めて言うが、今は皆が寝静まる夜更け。

つまり、こここの長である指揮官も寝てゐるということ。そんな時間に向かうべき場所は、トイレでも食堂でもない。

「…ふふつ」

その場所への扉が見えた途端、416は思わず笑みをこぼした。走り出しそうになるのを抑え、あくまで静かに、そして大胆に近付いていく。

”指揮官の私室”。

そこは文字通り指揮官個人の部屋であり、寝室にもなつてゐる。

この時間ならば、多少の例外はあれどあの私室で寝てゐるはずだ。今日は副官勤務ではなかつたため正確なスケジュールは入手できなかつたが、これまでの行動パターンからほぼ間違ひなく居るはずだ。彼女の目的は、ただひとつ。

それは――。

「…ん？」

「えつ？」

扉まであと数歩という所で、彼女の目の前に誰かが現れた。

反対側から、同じように近付いて来た者。辿り着いた後のことばかり考えていた416は、突然の邂逅にそのライム色の瞳を大きく見開かせた。

対してその相手は、桃色の髪を手櫛で整えようとしていたまま、固まってしまっている。

扉を挟み、相対する両者の間に流れる微妙な空気。その気まずい沈黙を先に破ったのは、髪を整え終えた桃色の方だった。

「…あらHK416さん。奇遇ね、こんなところで」

「…ええ、こんばんは。AR15さん」

「こんなところで何をしているの？もうすぐ消灯時間よ」

「ええ、大丈夫。ちゃんと消灯には間に合うわ。私は完璧よ？」
再び黙り込む二人。それはコミュニケーションを取りたくない、という理由からではなかつた。両者は戦闘用に研ぎ澄まされた思考力をフル稼働し、ある疑惑を抱いたのだ。

それは。

(こいつ…)

(まさか…)

(（指揮官のところへ夜這いに來た!？）

(いや待つて、落ち着くのよAR15。こういう時こそ冷静さを失つては駄目)

(まだそうとは限らない。そうだ、たまたまフラついていただけだろう。わたしの完璧な作戦に狂いなど生じるわけがないわ)

「ああ、もしかして子供みたいに慌てて、トイレにでも行くつもりだったのかしら？ごめんなさいね、道を塞いでしまって」

「いいえ、こちらこそ悪かつたわね。夜中に徘徊する趣味があるなんて驚きだけど、止める気は無いわ。それじゃあ」

そう言つて、互いに一步横へずれた。

互いに同じ、指揮官の私室側へ。

「…あの、何をしているの？トイレならそのまま真っ直ぐよ」

「…あなたこそ。行くなら早く行きなさい。このことは黙っていてあげるから」

譲り合う二人。

しかし、両者とも動く気はさらさらなかつた。
なぜなら。

(…こいつ、やはりそうだ)

(間違いない。こいつも…)

(指揮官に夜這いをかける気だ！)

似た者同士であつた。

先ほどまでの素知らぬフリから一転、一気に警戒態勢へ移行する。
(どうする…相手はあの404小隊。このまま素直に引き下がるとは思えない…)

(AR15…わたしがAR小隊あいつらに劣るとは思えないけど、油断ならない相手ね。まずは様子を伺いましょう)

「AR15、どうしたの？さつきから動かないけれど。壁が恋しくなつたのかしら？」

「それはこちらのセリフよHK416。少しでも動くと漏らしそうつていうなら話は別だけど」

…動かない。

ここまで言われて動かないという事は、やはりそういうことだろう。

チラりと壁際の扉を視界に入れ。あとほんの数メートルというところで、邪魔されるわけにはいかない。

しかし、直接指摘することはできない。それを口に出せば最後、きつとこう切り返してくるはずだ。

『夜這い？いや違うわよ。そんなことするわけないでしょ。…え？まさかそういうことなの？最初にそんな発想が出てくるということは、つまりそういうことなんでしょう？信じられない。戦場に立つべき存在が、まさか自分の指揮官を夜這いとは、堕ちたものね。』

つていうか引くわー』

(…くつ)

(…んつ)

それは駄目だ。

それは回避せねばならない。

それを言われてしまえば、もうきつぱり否定して立ち去るしかなくなる。

なぜならちよつと恥ずかしいから。

勢いだけで飛び出してきたものの、いざ客観的に見るとすごく恥ずかしい。だからこそバレたくない。それにそういうことをしようとしていた事が^{おおやけ}公になれば、收拾がつかなくなる。ただでさえ競争率は高いのだ。

というか立ち去った時点で相手の勝ちになってしまふ。せめてそれだけは避けたい。

つまり

(『絶対に悟られず、相手より先に入るしかない!』)

じり、とほんの少し距離を縮める二人。

駆け出せば扉は掴める。

開いている可能性は高くない。半々といったところだ。開いていればそのまま忍び込むことができる。それがベスト。

もし開いていなかつたとしても、専用の呼び出しブザーを鳴らせば、指揮官は起きて開けてくれるはず。寝ているところ申し訳ないが、背に腹はかえられない。その分ちゃんと尽くすつもりだ。

問題は、開いていなかつた場合。ブザーを鳴らし指揮官が応答するまでの間、時間を稼がねばならないこと。そしてそれ以前に、指揮官の私室を合法的に訪ねるのだということを相手に証明をしなければならない事だ。

前者は想定内だが、後者は完全に想定していなかつた。残念ながら、焦つてしまい不安定なメンタルではまともな代替案が浮かばない。

(どうする…そこらの人形ならいざ知らず、^{こいつ}416相手に姑息な手は

通用しないはず)

(かと言つて正当な理由が思い浮かばない…あれ? 指揮官の私室つてどんな用事で訪ねればいいの?)

(明日の任務の確認とか…いや別にわざわざ夜中に訪ねてするものでもないでしょう。明日でいいじゃない)

(やはり副官の日にすべきだつたかしら…くつ、わたしとしたことが。でもここまできて負けるわけにはいかない。こうなつたら…!)

意を決した二人がとつた行動は、これまた似たり寄つたりなものであつた。

「いつ、いたた、いたたたた。ど、どうしたのかしらー急に足がー」

AR-15はその場にしゃがみ込みながら、右足の膝あたりを押さえ始めた。

「うつ、うーなんだか氣分が悪くなつてきたわ。今にも強制シャットダウンしてしまいそうー」

416の方はとつて、壁にもたれかかりながら大げさに頭に手を当てている。

要するに演技だつた。

側から見れば白々しいものだつたが、本人たちにとつては迫真の行動だつた。

「いたー、今日の作戦で痛めたのかしらー。このままじや歩くこともままならないわー。どこかで手当てしないとー」

「ううー、目まいがしてとてもじやないけれど宿舎まで帰れそうにないわねー。どこか休める場所はないのかしらー」

AR-15は、ゆつくりと扉の方へ体重をかけながらにじり寄つていいく。

一方の416は壁伝いにじりじりと進み、私室のドアノブに手が届くところまで来ていた。

そして。

がつ!と音がするほど、扉にふたつ手がかけられた。AR-15は素早く立ち上がり左手を伸ばしたが、416の右手がドアノブに触れるのとほぼ同時になつてしまつた。

「……」

じろり、と両者の双眸が敵を捉える。

そこには作戦中のような鋭さが、確かにあった。

「…あの、手を離してくれないかしら416？私が先に手をかけたのよ」

「冗談は休み休み言いなさい、AR15。わたしの方が速かつたわ」扉へかける手にみるみる力が入っていく。我慢の限界がきたのか、両者とも顔が引きつっている。

もはや堂々と指揮官の私室へ入ろうとしているのを、お互い気付いていなかつた。

「ちよつ、離しなさい！あなた氣分が悪いんでしょう？そんなに動けるなら早くメンテ室にでも行きなさいよ」

「くつ、そつちこそ足はどうしたのよ。普通に立つてるじゃない！ものすごい踏ん張つてるじゃない！これからAR小隊は」

「それは今関係ないでしょう！だから、ぐつ、やめなさいって！指揮官の迷惑を考えて！」

「迷惑なのはあなたの方よ！このつ、こんなに騒がしくたら起こしてしまうわ！」

彼女らは我先に入ろうと、ぐいぐいと体を押し合っている。

扉に置いたままの手と交差するように伸ばした右手で416の頬と顎を抑え込み、より扉へ近付くため左肩をねじ込むように差し入れるAR-15。

顔を押し上げられながらも、扉から離した右手でAR-15の鎖骨辺りから肩にかけてを押し返し、かろうじてできた隙間に入り込む形で左手を扉へ伸ばす416。

ふたりの力は拮抗していた。ぷるぷると筋肉繊維が震えだす。

取つ組み合いの衝撃でがたがたと扉が音を立てた。

ここまで力を加えても開かないということは、やはり鍵は閉まっていたようだ。

「わかつ、ちよつ、わかつたわ、こうしましよう！一緒に入った後あんたが出て行くのよ。これこそ完全無欠の行動よ！」

「欠落し過ぎでしようが！やつぱり修理が必要なのはあなたの方よ！半年メンテしてなさい！」

唯一自由な口で相手を牽制する。

その言い争いは廊下中に響くほどヒートアップしていた。ここで指揮官に見つかれば、ただの喧嘩だと一蹴され宿舎へ強制退去なんて可能性もある。

その前になんとしてでも決着をつけねば。

そう思つた矢先。

「…何やつてんのよ、アンタ達」

AR-15側の方から声が聞こえてきた。

疑念と罵倒が入り混じったような、刺すような声。こう着状態のままそちらへ同時に振り向くと、そこにいたのは赤い瞳のサイドテール。手元に書類をいくつか抱えている。

「…わーちゃん」

「わーちゃん言うな！そんなところで何やつてんのかつて聞いてるの！」

WA2000は、ふん！と鼻を鳴らしながらふたりを見みつけた。咄嗟のことにも固まる両者だつたが、思い出したようにあたふたとい詰を述べ始める。

「こつ、これはその、急に足が痛くなつちやつて、その」

「わ、わたしはほら、メンタルモデルの調子が悪くて、どこかで休憩しなければならなくて、あの」

「はあ、どうでもいいけど、そこ退いてくれる？邪魔なんだけど」「え、ええ…」

自分から聞いておいてどうでもいいとは何事か、と憤りを見せる416。その隣ではAR-15が素直に横へ引き下がつていた。

若干の罪悪感を感じていた416は、威嚇しながら近付いてくるWAを前におずおずと一步譲つた。

障害を無事取り除いたWAは悠々とキーを取り出し、私室の扉を開け

「「ちょっと待つた!!」

「えつ、なに!?」

呆然とその様子を眺めていたふたりは、ふと我に返ったように叫び

WAの腕をがつしりと両側から掴んだ。

「あなたそれ指揮官の私室の鍵!? なんで鍵なんか持つてるの?!」

「い、いやだつて私今日——」

「まさか、これから指揮官とそういうことを…!」

「そ、そそそういうことつて、ど、どういうことよ! 違うわよ! 私はただ——」

「合鍵をもらつてるなんて…そんなこと

「いつたい…どこが足りないの! わたしは完璧なはずなのに」

「な、なに勘違いしてんのよ! だから、私は副官業務で来てるだけよ!

！」

動搖しながらも一喝するWA。

それを聞いたふたりは、彼女の持つ書類のことを思い出した。

「ふ、くかん…」

「そうよ。この書類を後で持つて来いって頼まれてるのよ。ていうかアンタ達も経験あるんだから、副官が私室の鍵を持つてることくらい知つてるでしょ!？」

「あ、ああ…そうだつたわね」

「…ま、アイツは何人かの人形には鍵渡してるらしいけど、つて早く離しなさいよ」

「ええ…ごめんなさいね」

先ほどまでの威勢はどこへやら、抜け出るような声を出すAR—1
5と416。

ひどくやつれた顔をしながら、脱力するようにWAの腕から離れた。

「な、なんのよまつたく…」

「…ねえ、416。あなたもそういう目的で来たの?」

「…ええ、そうよ。やはりあなたもだつたのね、AR15」

「そういうことつて…えつそういうこと!?」

肩を落とし、虚ろな目で話し始めるふたりに、過敏な反応を示すWA。彼女らがそういうことをするために来たのだと、ようやく理解したらしい。

顔を赤らめ、持っていた書類を落としそうになつてゐる。
「なんかもうどうでもよくなつてきた。何やつてるのかしらね、私たち」

「なんだか惨めな気分よ。はあ、こんなことして、あの人人が手に入るわけでもないのに」

「ちよ、ちよ、ちよつと待ちなさいよ、そういうことつて——」

WAが扉から手を離しふたりに詰め寄ろうと向き直つたとき、待望の扉が開いた。

「おいうるさいぞ、宴会なら他所でやつてくれ。今何時だと思つ」
瞬間、間髪入れずにわずかに開いたドアの隙間にAR—15が片足を突つ込んだ。

ほとんど反射的な行動だつた。

AIに刻み込まれた目的のための活路を、体がとつさに動き確保したのだ。
それとほぼ同時に、416の手も扉を掴み、押し開けようと力を込めていた。

求めていた指揮官の姿を見て、瞳に光が戻つていく。

唖然とする指揮官を前に、意味深な微笑みを浮かべるふたり。WAは書類を落とした。

「…ねえ、416。提案があるんだけど」

「奇遇ね、AR15。わたしも同じことを考えていたわ」

「えつえつ、あつ。わ、私もよ!」

互いに顔を見合わせ、しつかりと頷いた。

考えることは同じ。

ちよつとした、停戦協定。

出遅れまいと飛びつくWAと共に、扉を無理やりこじ開けた。

そして。

「…なあ、なんで無言に…あつおい！勝手に入つてくんなつて、
ちよつ、力強つ…何してんだつて、いてててててて！関節！関節キ
マつてるつて！いてて、一体なんのつもり…いつて！おい！あつ
あつ、何脱がそうとしてつ、やめつ、あ、ああああああつ——
!!!」

深夜の廊下にこだました叫び声。

静かに閉められた扉に鍵をかける音が、その男の耳に入ることはな
かつた。

そしてその後、指揮官の私室の扉が開いたのは昼方のことであつた
と、何人かの人形が証言していた。

中で何が起きていたのか。

それを知る者は、ごくわずかだ。